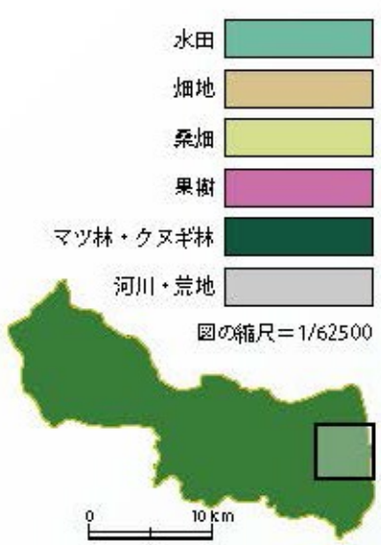
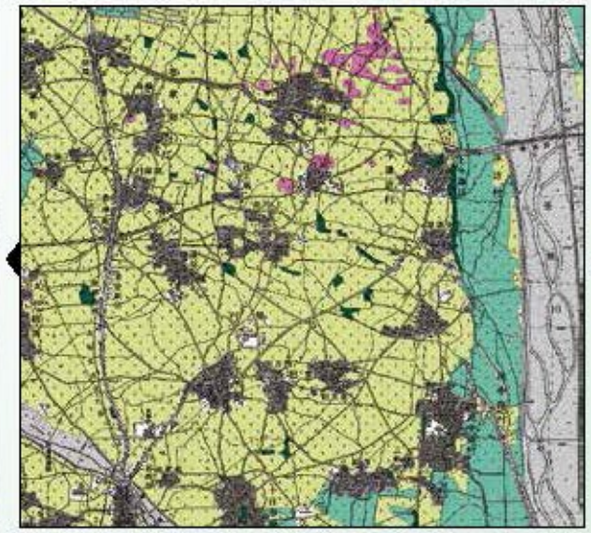
ふるさとの誇り 122

「西郡盆唄」の世界

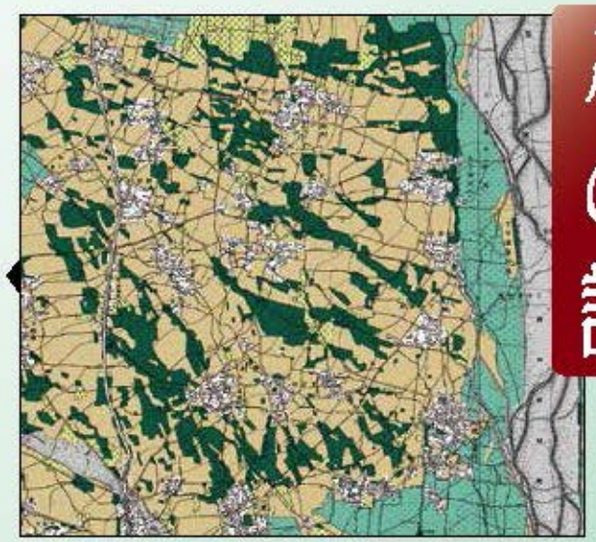
～庭の先から桑の海～



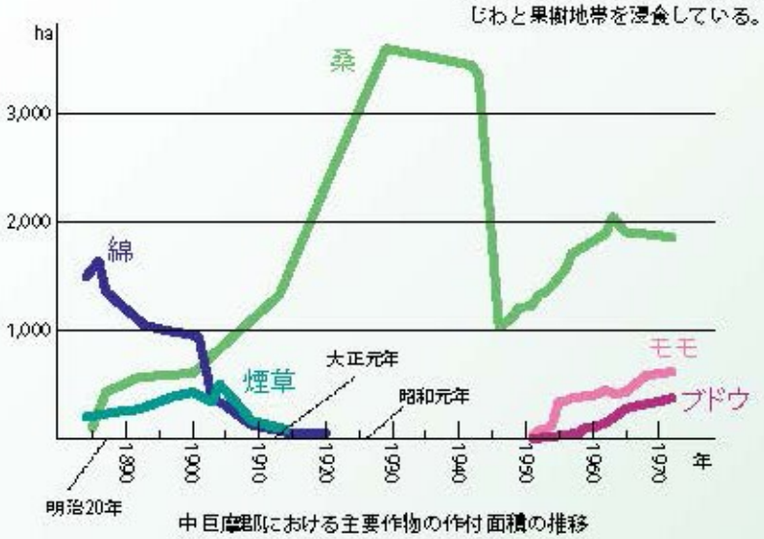
現代の様子　平成15年（2003）
開墾された桑畑が、そのまま果樹園に転換されていったことが分かる。一方で、市街化も進み、じわじわと果樹地帯を浸食している。



養蚕が最盛期だった頃　昭和4年（1929）
集落や畑地を隔てていた林などが、ことごとく桑畑として開墾され、その他一部水田など、桑の栽培を行なえそうな場所には全てが桑が植えられている。まさに"庭の先から桑の海"であったことがわかる。一方で、西野周辺には、早くもサクランボをはじめとする果樹園があり、次の時代への芽生えも見ることができる。



木綿が最盛期だった頃　明治21年（1888）
御勅使川扇状地上では、集落や畑を隔てるように、未開拓のクヌギ林やマツ林が広がっており、現在とはかなり異なる景観だったことがわかる。桑畑もみられるが、中心は綿花栽培を行っていた畑地である。



中巨摩郡における主要作物の作付面積の推移
※『山梨県統計書』による

ハア～ わたしゃ西郡原方育ち
米のなる木を　まだ知らぬ
ソーダ　ソーダ
米のなる木を　まだ知らぬ
ソーダ　マッタクソーダ

ハア～ 木綿たばこでならした里が
庭の先から　桑の海
ソーダ　ソーダ
庭の先から　桑の海
ソーダ　マッタクソーダ

ハア～ 盆が来たそうでお寺の庭に
切子灯ろうの　灯が見える
ソーダ　ソーダ
切子灯ろうの　灯が見える
ソーダ　マッタクソーダ

ハア～行こうか小笠原帰ろうか吉田
ここは十五所　木屋の前
ソーダ　ソーダ
ここは十五所　木屋の前
ソーダ　マッタクソーダ

※西郡盆唄の歌詞には、このほかにもいくつかのバリエーションが伝わっています。

十五所　木屋の前
西郡盆唄の四番に唄われた十五所の「木屋」は、甲府から開国橋（昔は渡船）を経て小笠原に至る戸田街道（現在の県道5号甲府南アルプス線）の吉田と小笠原の間に位置する十五所集落にあった呉服・雑貨商の「木屋（きや）商店」。たばこ、米、塩・・・・、当時そこに行けば何でも揃ったという。民謡に唄われるだけあって、かつては地域で知らない人がないほど有名な店だった。図は、大日本職業別明細図　昭和6年（1931）。南が上に描かれているので注意。

江戸時代から特産品であった木綿が、安価で品質のよいインド綿やアメリカ産の綿などに押されて明治二十年（一八八七）頃をピークに次第に衰退し、煙草や特に桑の栽培に取って代わられたことは、先月のこの欄で紹介しました。

その後、明治三十年（一八九七）に飯野村に煙草の専売所（専売局飯野出張所　倉庫町）が新設され、生産が伸びるかに見えた煙草も、生産に手間がかかることや、その二コチンが蚕に悪影響を及ぼすことなどから、大正六年（一九一七）の飯野出張所の廃止とともに衰退し、御勅使川扇状地はまさに桑一色となりました。

この頃つくられたとみられる民謡が今回紹介する『西郡盆唄』です。そこには、御勅使川が運んだ砂礫の台地である御勅使川扇状地（＝原方（はらがた））が、稲作に不向きであったことが「米のなる木をまだ知らぬ」といった歌詞で滑稽（こっけい）に表現されるほか、「木綿たばこでならした里が庭の先から桑の海」というように、木綿、煙草から桑への転換と養蚕の拡大の歴史が唄われ、まさに当時の農村景観の大転換を映し出す歌詞となっています。

戦後、養蚕の衰退とともに、主要な農産物は、桑からサクランボやモモ、ブドウといった果樹に転換していきますが、御勅使川扇状地における地域産業の移り変わりの歴史は、私たちに豊かな暮らしを求めつづけた先人の苦労と活力を教えてくれています。

文／写真　文化財課

桑の海のなごり
かつて御勅使川扇状地を埋め尽くした桑の海の面影はほとんど見られなくなったが、現在も所々に果樹園と果樹園の境界を示すために、桑の木が残されており、往時をしのぶことができる。

『西郡盆唄』は、山梨県立図書館ウェブサイト「山梨県の民謡紹介」から聞くことができます。↓
https://www.lib.pref.yamanashi.jp/kosyu/kyozai/minyo.html
また、左の二次元コードをスマートフォンなどで読み込んで聞くことも可能です。